

---

# 誘拐は神様の前で

村津 ヨシタ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

誘拐は神様の前で

### 【Nコード】

N8766X

### 【作者名】

村津 ヨシタ

### 【あらすじ】

高校3年生の夏休みがいかに貴重かという事を理解できたら立派な大人だ。

大抵それは大人になってから気付くからとも言える。

受験生でもある3年生のクラスに長身の転校生が現れた。

何でも上手にこなす傍ら、目立つ事を好まない斉藤の事を学級員の長谷は気に入った。

その長谷はクラスのアイドルである境 菜摘が自分の事を見つめる目に気付かない。

人生を左右する大きな岐路に菜摘は思い悩む。  
それに気が付いたのは斉藤だった。

## 第1話

転校生がイケメンだったので女子達がざわついた。梅雨が明けきらない7月初めの朝。

高校三年生の最後の中間試験の直前という、転校には珍しいタイミングである。

紹介された転校生は斉藤裕紀。何よりも長身が印象的だった。顔つきもシャープでハーフのようにも見える。

挨拶する声は低く小さかった。割とあっさりとした紹介で斉藤裕紀は席に着かされた。

クラス委員の境 菜摘と長谷 隆の間に空席が作られた。クラス委員の二人に斉藤の面倒をみてやるようにという計らいだ。

残り半年あまりの高校生活だが、毎日交代で朝礼の挨拶をおこなう当番や体育の授業でつかう体育館の鍵の借り方まで学校にはそれぞれのルールが細かく取り決められている。知らないと不便で本当に困る。

長谷 隆は隣の席に座った斉藤裕紀に声を掛けた。”ヨロシクな”。すると自己紹介での壇上の態度とは変わって斉藤は笑った顔を向けた。

こういう明るそうな奴なら上手くやれそうだな、と長谷は思った。モチそうだな、とも。

## 第2話

この町は海と山の境にある。地方都市という程は大きくないが、名も無い田舎町という程には小さくもない。より海に近い、つまり町の低い部分には大きな半導体工場があつてそれを囲むように幾つかの小さな町工場がある。少し離れた海沿いは住所で言うならば隣の市になるのだが工場で出来上がった製品はそこにある港から海外へと輸出される。町には他に産業といえば山の手で少しばかりの蜜柑農家が残っているだけで多くは主が高齢化して年々経ることに切り売りされて宅地になつていった。

要するに農業から先程の世界的な半導体メーカーの工場がこの町の飯の種に移り変わつていく、その過程にあるということだ。

農地から転用された新しい宅地には所得の高い者が住むようになり、大抵は例の半導体工場の中で背広を着て働くような者達だった。そこで作業服を着て働く従業員はもう少し低い土地の部分に暮らし、工場の脇を流れる川でちょうど町は山側と海側に分けられていた。

クラス委員の長谷 隆の家は海側だ。親父は工場の2代目で半導体工場に部品を納めている。昔は自動車の部品を作っていたが長男が家業を継ぐ意思をみせると、これから先も需要がある半導体工場への仕事に切り替えた。隆は次男だ。

町には高校は2つきり。海側の工業高校と山側の普通科の高校だけ。隆は高校を出たら都会の大学に入ろうと決めていたから工業高校に進んだ兄とは違う山側の高校に進んだ。

ラグビー部に入ると9人しかいなかった部員で自動的にレギュラーになった。しかし隆は部員の勧誘を始めて2ヶ月で部員を20名にするると新品のボールを10個ばかり学校に購入させる事に成功した。父親が工場の仕事を取って来ては、仕事場の機械を入れ替えていく様を真似たのだと隆は言った。

正直で自分の意見を持ち、目標と約束の実行力がある隆はそれ以来、  
今日までずっとクラス委員であり続けた。

### 第3話

人はやはり人に興味を持つのだろう。

隆が気になるのは休み時間の斉藤裕紀の足取りである。これが判らない。

普通、人が学校での休み時間取る行動には3パターンあると隆は考えている。

まず1人行動するケース。トイレに行くか購買でパンを買うケースが殆どだ。

2つ目は2、3人またはそれ以上でグループ行動するケース。この場合は構成されたメンバーによってパターン化が難しいが、同じ部活の仲間で行動していれば間違いなく部活の準備だ。他には共通の友人のいるクラスへ連れ立って出掛けていたりする。

3つ目は教室の中から出ないケースだ。よく見ていると教室から一歩も出ずに毎時間必ず端っこの窓際で集まる特性を持ったグループがあつたりする。

斉藤裕紀はどれにも当てはまらない。転校して来て3日目。まだ集団では行動するはずは無い。といっても休み時間に教室の中にはいない。気が付くといつこのまにか姿が消えているのだった。

また、斉藤君がいないのね。

境 菜摘が隆に声を掛けた。斉藤裕紀がいなくなる事に気が付いていたのは同じだった。

彼の席は二人の間に位置するのだから気付かない訳は無い。でも、いつも気付くとそこにいない。それでいて次の授業にはきちんと戻ってくるのだ。

ときどき、影のようにつつすら透き通って消えてしまいそうに感じる。

菜摘の斉藤に対する印象はそうだった。

3日目だからだろうけど、まだ斉藤裕紀の事が良くわからない。聞くと隆も同じように思っていた。

菜摘と隆が理解した斉藤裕紀について。

背が高くて足が速い。

割と勉強はできる。

無口だが、暗い奴じゃない。

群れる事は好きじゃない。

隆はそれに付け加えた。すぐにどこかに消える。

そうそう！と菜摘は笑った。

3時限目の始業ベルがなる頃に斉藤はふらつと戻って来た。



## 第4話

境 菜摘の家は、この町の全体を見下ろせる高台の上にそびえるように建っている。

境家は、この町の中心となって常にまとめ役を果たして来た旧家だ。戦前には付近の農家ほとんどを使う農場経営者であり、戦後に進駐軍が行った農地解体によって資産が分散させられた後も町の町長や組合の長を勤めてきた。

菜摘はこの家で、祖父と祖母、それに母と暮らしている。

父と兄は、それぞれ別々に東京で暮らしており、父は霞ヶ関で役所勤め、兄はの駒場の大学に通っている。

祖母や母は菜摘を東京の学校にいかせなかった。

菜摘も父や兄のように東京で暮らしたいと思つた事は無かつた。

何にも無い町だという人もいる。同級生の中にも大学進学をきっかけに都会へ出て行く者もいる。

でも菜摘は、人一倍この町に愛着を持っていた。

特にこれからの夏の夕陽は最高だ。丘の上から海を見るとすぐに小さな答高島が見える。

夏の日の入りでは、夕陽は海と空を真っ赤に染めて、この答高島の脇に沈む。

島は夕陽に焼かれて黒い塊になり沈む太陽の赤と見事にシンクロする。

菜摘は丘の上からの景色を見て育った。

日が暮れて空が蒼く霞む頃には、点々と家々の窓に明かりが灯るのを見て育った。

工場の終業の頃には帰宅する者達の動く様子がまた明かりとなった。それは町の営みを手のひらサイズで俯瞰してきた事になる。

境家の人間はそうして町全体を愛する対象として育つのだ。



## 第5話

その日も空は澄み渡る青空で、その中には太陽以外のなにものも無かった。

菜摘はこんな空を見上げるのが大好きだった。

あごを上げて、いつもより沢山の空気を胸に吸い込むと、まるで体が空気に溶けこむようだ。

期末試験が近いというのに午後からは課題授業である。

大小の工場がいくつも有る川向こうの町の中にある工場の見学に行くという。

試験勉強や受験を控えた生徒達の息抜きだろうか。

生徒達への気遣いというより先生達の都合によって、と考えてしまう。

それがさあ。長谷隆が菜摘に話しかけた。どうやら俺ん家の工場に来るらしいんだよね。

俺もさつき先生から聞いたんだよな。頭をかきながらバツが悪そうに隆が言う。

驚くよりも先に隆の表情を見て笑ってしまった。

隆はラグビーで鍛えた体こそ大きいが、顔はやや童顔で笑うとクシヤと目がなくなる。

ギャップが面白くて周りを見た。すると斉藤裕紀がこっちを見ていた。

家が工場だなんて知らなかったよ。斉藤裕紀とは少しずつ授業の合間に話をしたりする事が増えていた。

時々、ふっと皆の前からいなくなる事はまだある、その理由が何か聞けていなかった。

コウジョウというよりコウバって言った方が良さそうな小汚いところなんだけどさ。

隆は、自分が生まれ育った家の事をそう言った。

そして斉藤裕紀に、年に1度位そのような町工場や商店を見学に行く課外授業がある事を説明した。

まさか、自分家に行く事になるとは思わなかったよ。なんか変だよなあ。親父も何も言っただけじゃなかったし。

そう言っただけで、隆はまたクシヤツとした顔になって笑った。

菜摘は、この隆の顔も好きである。

それに気を取られて斉藤裕紀が、親父かあ、と呟いたのを菜摘は聞き逃した。

## 第6話

『この町は、道と道とが階段で繋がられている。』  
斉藤裕紀が言った。横を歩くとその背の高さのために見上げる角度が違つた。

あごの辺りしか見えないので、薄い唇が美しく開くのを見ながら菜摘は話した。

初めてだわ。こんな気持ちよく晴れた日にこの階段を降りるのは、私は自転車通学だから雨の日以外は階段を通らないから。

課外授業へ出掛けるため生徒達は、校門を出て急な階段を下りている。列を作るような作らないような、定まらない隊列である。丘の上に建つ学校から出掛けるにはこのように階段を下りる必要がある。

車や自転車に乗ったなら、この日当りの良い斜面を綴れに折れながら緩やかに下方の町へと通された道路を通行する。

階段はそのS字に連なる道路を串に刺すように1本で貫くように作られていた。少し古いコンクリート敷きだ。

所々錆びた手すりが申し訳なさそうに左右共に1対ある。

『ここからだ、町工場や皆の家の屋根が見渡せるものね。』

菜摘と斉藤とが並んで歩く事も、このように二人での会話になる事も初めてだった。

大抵は隆や他の女の子も加えての談笑であつたから、今日はなんだが照れくさい感じがしてきて菜摘は前だけを見ながら話した。

高い位置から陽の光が降り注ぐ。改めて広くはない町だと思つ。階段にカクカクと折れ曲がつた菜摘と斉藤の影が映っている。

列の先頭で階段を下りる長谷隆の短く刈り揃えた髪が見える。

『長谷の家が町工場だつて知っていたかい？』艶のある中性的な声色を持つ斉藤裕紀。

『知っていたわ、偶然、私達は1年のときから同じクラスだから。』

菜摘の声は色で例えるならばブルー。性格そのままに冷静で落ち着きを与える弦楽器の音色。

『お父さんの事も知っているのかい？』

『うん、会った事があるの。すっごい元気で面白いお父さんよ。いかにも長谷君のお父さんって感じ。』

菜摘は思い出したのか笑いながら言った。『長谷君は、皆が、お父さんの事を見てどんな風に言つか気にしてたわ。』

『誰でも、こういうときは照れるものさ。』

『それに、自分の家に社会見学だなんて聞いた事ないものね。』

先程からなんとなくやたら長い斉藤裕紀の指の動きを見ていた。やっぱり斉藤裕紀の顔をみるのは照れくさい。

『斉藤君の家に社会見学に行く事になったらどう？』

『俺の家は、工場とか店をやってるわけじゃないから、社会見学に行く事にはならないよ。』

『もしも、お父さんの職場に社会見学に行く事になったら？』

斉藤は少し黙った。『俺のおやじは、単身赴任中だからね。見学には行けないだろうな。』

『やっぱり照れくさい？』菜摘が言うと斉藤は微笑んで頷いた。

斉藤は、おしゃべりが苦手と言うわけではなさそうだが、何か別の世界で生きているような距離感、接しても手応えの無さを感じる事があった。休み時間の行き場所の事はいまだに良くわからない。

これには、ミステリアスで良い。というクラスの女子の評価もあるようだ。菜摘は賛同しかねた。

斉藤はクラスメイトであるのだから外見や、傍から眺めたときに受ける感じで評価するべきではない。

もっと斉藤に近づいたときに彼の中から自身の有様が見えてきて判り合えるようになる事を望むのが普通ではないかと思う。

振り返るまでもなく、数名の女子達の声が聞こえて来た。並んで歩く二人に追いついて来たのだ。

なんで、ツーショットで歩いてんの？ ちょっと邪魔しようかと思

って来ました！

などと言いながら会話に割り込んで来た。明らかに斉藤裕紀が目当てで来たのだと菜摘には判った。

二人は、いつでも仲良すぎるんじゃない？ ひよっとしてなんかあるの？

冷やかされて菜摘は困った。

こちらの会話が聞こえている訳もないが、なぜか目だけで長谷の方を見る。

『もう、なんで急にそういう事を言うの？』菜摘の精一杯の牽制。彼女は、特に話題があるのでもなさそうだ。斉藤君の家ってどこだっけ？などと聞いている。

菜摘も知らなかった。しかし、斉藤はそれには答えず1人だけ足を早めた。

『長谷と話してくる』あとは、長い足でどんどん歩いて行った。クラスメイト達は残念がった。クラスの中にいる斉藤ファンは菜摘が思うよりも多いようだった。

ふと、菜摘は斉藤裕紀が1人で先に歩いていった訳が、クラスメイト達に冷やかされる自分に気を遣ったのだと思いついた。

斉藤自身が、彼女達を煩わしく思って離れて行ったのではない。菜摘には、斉藤には、先程自分が感じた冷やかしに対する照れくささや、気恥ずかしさのような感情が欠落しているように思えるのだ。むしろ斉藤裕紀をミステリアスというならば、こういう部分なのだ。

丘の斜面を覆う、楠の林から蝉の声が聞こえていた。

楠林そのものが菜摘の高校最後の夏に向けて、全力で夏の価値を唄っていた。





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8766x/>

---

誘拐は神様の前で

2012年1月12日01時49分発行